

■藤原道長(御堂関白) ふじわらのみちなが ・ ・ ・ ・ ・ 966＝	思わぬ形で覇権を握ると、策と気配りで華榮を現出、王朝文化を開かせたが、発病して念仏の最期に。
延喜式施行・ ・ ・ ・ ・ ・ 967＝ 1歳 ・ ・ ・ ・ ・ 968＝ 2歳	摂津守藤原中正の女時姫を母に、 <u>藤原兼家の五男に生まれる。</u> 父は、兄の兼通の娘安子が村上天皇の中宮で出世を阻まれていたが、安子の死去で遇されるようになり、 (父)村上天皇の死去とともに、兄兼通に代わって蔵人頭となり、冷泉天皇が即位するや、 (父)娘超子(道長の姉)が入内するとともに、兄兼通を越えて従三位に昇り、
安和の変・ ・ ・ ・ ・ 969＝ 3歳	(父)参議を経ずに中納言に進み、安和の変も乗り越えて、
・ ・ ・ ・ ・ 972＝ 6歳	(父)大納言兼右大將まで進んだが、兄兼通が故中宮安子の遺命を円融天皇に申し立て、逆転され、
尾張国守罷免 ・ ・ ・ ・ ・ 974＝ 8歳 ・ ・ ・ ・ ・ 975＝ 9歳	父の兄兼通が関白となって、父は昇進を阻止され、その五男では権力の座も遠く、
・ ・ ・ ・ ・ 977＝11歳 ・ ・ ・ ・ ・ 978＝12歳	兼通が死去して、 父が右大臣になったばかりか、娘詮子(道長の姉)の入内に成功するもなお、雌伏を余儀なくされるが、
・ ・ ・ ・ ・ 980＝14歳	詮子が円融天皇の皇子(一条天皇)を出産すると、
永観荘園整理 ・ ・ ・ ・ ・ 984＝18歳	父が、円融天皇を退位に追い込み、皇子を花山天皇の皇太子にして、ようやく情勢が一変、
花山天皇出家 ・ ・ ・ ・ ・ 986＝20歳 ・ ・ ・ ・ ・ 987＝21歳	一条天皇が踐祚し、父が摂政となるや、強い権限を持つ母后(天皇の母)たる姉詮子の肩入れもあって、 *従四位上から3階を越えて従三位に昇り、以後累進、
尾張百姓訴え ・ ・ ・ ・ ・ 988＝22歳	参議を経ずに権中納言になるが、
藤原定子入内 ・ ・ ・ ・ ・ 990＝24歳 ・ ・ ・ ・ ・ 993＝27歳	摂政関白の朝廷における独自至上の地位を確立させた父兼家が死去、関白になった兄道隆が、その娘定子を入内させ、一条天皇の中宮にしたことで、出世の道が阻まれるなか、姉詮子の配慮で中宮大夫に任じられると、菓子配りや花見企画など、得意の気遣いで、後宮の女房たちからも、支持されるようになり、
道長内覧宣旨 ・ ・ ・ ・ ・ 995＝29歳	*疫病が流行、兄道隆・道兼が相ついで没したため、その後継をめぐって、道隆の嫡男伊周と激しく争うも、 、またしても姉詮子の強力な後援によって、この争いに勝ち、内覧の宣旨を賜り、右大臣に昇る。その後、 摂政・関白にならずも、それ以上の権勢を振るうようになって、“御堂関白”と呼ばれ、この年つけ始めた日記は、「御堂関白記」として現存するが、権力者自筆のものとしては最古で、世界記憶遺産にもなっているだけでなく、近年研究が進み、その率直な書き跡から、単なる権力盲者でなく、多面的で、気配りにも優れた人物であったことが知られるようになった。この大出世も姉のお蔭と素直に書き留めている。
花山法皇事件 ・ ・ ・ ・ ・ 996＝30歳 藤原彰子入内 ・ ・ ・ ・ ・ 999＝33歳 二后並立・ ・ ・ 1000＝34歳	伊周が花山法皇との間に事件を起こして失脚するなか、左大臣に進んだ。 女彰子(上東門院)を一条天皇の後宮にいれ、すでに兄道隆の女定子が后位を占めていたにもかかわらず、 一旦出家した定子には、神事を行うことはできないと、公卿らを説得して、彰子を皇后に立て、2人の妻后が併立する新例を開いた。藤原行成の日記によれば、この前後の道長の様子は、まさにノイローゼで、相当に悩んでいることが窺える。
・ ・ ・ ・ ・ 1002＝36歳	定子に仕えていた清少納言が書き留めているように、一条天皇は、定子と相思相愛であったが、紫式部を彰子に仕えさせて、源氏物語の愛読者になっていた一条天皇の心を傾けさせることに成功し、
・ ・ ・ ・ ・ 1007＝41歳 源氏物語始・ ・ ・ 1008＝42歳	金峰山参詣。 彰子に敦成親王が生れ、外戚となる。出産の様子の一部始終を紫式部に記録させ、貴重な史料にする。
・ ・ ・ ・ ・ 1011＝45歳	このほか、書物を与えるなどして、和泉式部や赤染衛門など、一流女性からも信頼され、 一条天皇が死去。道長の甥にあたり、25年間、皇太子のままに置かれ、ようやく即位した三条天皇にも、関白に準ずる内覧の臣として補佐するも、道長への恨みから、何事にも反対する姿勢であったため、
和漢朗詠集・ ・ ・ 1012＝46歳	娘の妍子を三条天皇の中宮にして、なんとか御そうとするもうまく行かず、一上(首席公卿)として公事・政務を奉行する上で、とくに人事のことが問題になり、公卿らと相談するうち、
源氏物語・ ・ ・ 1014＝48歳	2度にわたって、内裏が焼失して、天下滅亡の噂がたったのを機に、天皇の不徳が原因であること、また、天皇が当時流行し、道長自身も飲んでいた仙薬(硫化水銀)で、目や耳が悪くなっていることを理由に、
藤原道長摂政 ・ ・ ・ ・ ・ 1016＝50歳 道長太政大臣 ・ ・ ・ ・ ・ 1017＝51歳 三后鼎立・ ・ ・ 1018＝52歳	ついに、三条天皇に強請して位を譲らせ、敦成親王を後一条天皇にし、外祖父として摂政の座に就いた。「御堂関白記」では、この間の記述を、後から墨で塗りつぶしているところが面白い。 太政大臣に任じられ、摂政を長男頼通に譲ったが、権勢は少しも衰えず、“大殿”と恐れはばかれた。 *さらに後一条天皇の後宮に女威子をいれたが、威子を皇后に立て、妍子は皇太后に転上したので、太皇太后彰子とともに、3人の女子が三后に並び立つ未曾有の盛観を呈した。かの有名な’この世をばわが世とぞ思ふ望月のかけたることもなしと思へば’の歌は、この日の威子の立后を祝う公卿の宴席で、道長がみずから十六夜の月にかけて詠んだ歌であるが、道長に批判的であった藤原実資の日記に書かれているだけで、自らの「御堂関白記」にはそのような驕りは見られず、むしろ、あまりの華榮におののいていたととれる歌でもあろう。実際、そのころから道長は病気がちになって、太政大臣を辞し、
刀伊来寇・ ・ ・ 1019＝53歳 ・ ・ ・ ・ ・ 1020＝54歳	*出家して行観(のち行覚)と称し、ついで無量寿院(のちの法成寺)の造営に力を傾け、 金堂も建ち、法成寺の名も定められ、引き続き薬師堂や釈迦堂なども造立された。これがすなわち御堂で、道長の別称にもなった。「御堂関白記」の最後は、連日、念仏を何万遍繰り返したかのみを記し、
藤原道長没・ ・ ・ 1027＝61歳	急速に心身の衰えを見せ、無量寿院の九体阿弥陀仏から引いた糸を手にして、没した(症状から癌または糖尿病と見られる)。